

母と子の絆を深め、退院後の育児不安を軽減させる 出産後の環境とは

分担研究：母子同室と母性の健全育成に関する研究

研究協力者

福田雅文

要約：子育て支援の中で現代の女性の大きな問題点は
(1) 少産少子、核家族化のため、初産の母親は子ども扱いにほとんど慣れておらず、出産後の育児に強い不安を抱えている。

(2) 子育てを楽しめない、子どもを愛せない母親が増えている。

(3) 子どもの要求を受け入れることが出来ない母親が増え、極端な場合は児童虐待に至る例が増加している。

これに対して出産直後から母と子を切り離さず、授乳を介した母と子のスキンシップを増やすことにより、母親は子どもの扱いに慣れ、子どもに対する愛情が強くなった。さらに出生早期からの頻回授乳により母乳分泌が促進され、特別な問題がない限り、経膈分娩、帝王切開ともに母乳だけで退院できるようになり、母親は子どもの要求を満たすことを楽しみとし、生後1週間で驚くほど育児に自信を持ち始めた。従って、出生早期から母と子を一緒にし、母乳育児を支援することは退院後の母親の育児に大きな自信と喜びを与えるものと思われる。

見出し後：母子同室、直接授乳、スキンシップ、
母乳育児

研究方法：

平成4年より長崎大学で出生した正常新生児に対して出産後、出来るだけ早期より母子同室にして、赤ちゃんの要求に合わせた自律授乳とし、子どもの世話も母親を中心にして必要に応じてサポートしていく体制をとった。支援の方法は赤ちゃんの抱っこや扱いに不慣れで不安の強い母親に対して、スタッフは母親の子育ての能力、子どもへに対する気持ちの変化、不安の程度を把握してその母親に応じた柔軟な対応をとる。これまでの管理的でマニュアル通りの指導では母親の不安を逆に増強させたり、子どもに対して拒否的になったりして、逆効果になりかねない。出産後の精神的に

肉体的にも不安定な母親に対して、表1のような配慮を行った。

表1 母親への配慮

- 1) 母親のやり方に批判的にならず、共感し思いやる気持ちで接する。
- 2) 強制的な、管理的な言葉や行動は控える。
- 3) 母親が孤立感を持たないよう声かけを多くする。
- 4) 出来るだけ子育ては母親に任せ、スタッフは暖かく見守るような気持ちで安心感を与える。

結果：

- 1) 母と子が一緒に生活することにより、授乳のタイミング、睡眠は自然に一致してきた。
- 2) 母と子の生活リズムは初産、経産、母親の育児能力などにより異なり、母親の能力に合わせて温かく見守るようなサポートをする事により、育児に不慣れな母親でも生後1週間で大きな成長が見られた。
- 3) 母親は出産早期より授乳を介したスキンシップを重ねるごとに子どもに対する思いが強くなり、さらにスタッフの支援体制が円滑に運ぶにつれ、表2のように母と子の強い絆を思わせるような母親の意見が聞かれるようになった。
- 4) 1ヶ月検診時に子どもに対する愛情の程度をアンケート調査した。今回我々が支援した母子同室した群と以前に高橋ら¹⁾の報告した母子同室群を比較すると子どもに強い愛情を示す割合が増え、逆に子どもを否定するような母親は減少していた。

(表3、4)

- 5) 退院時の母乳育児の割合をみると母子同室導入初期の平成4年では70-80%に上昇し、出生早期からの母と子の直接授乳を介した頻回のスキンシップを推奨し、支援体制が円滑になってからは経膈分娩、帝王切開に関わらず、図1のようにほとんどの母親は母乳育児を確立するようになった。
- 6) 母子同室に対する評価を1ヶ月検診時調査した。その結果、表5のように初産婦の約50%は体がきつく、ゆっくり休みたいと思ったと答えているがそ

の初産婦の96.3%が育児に慣れて良かった、70.4%がそばにいて嬉しかった、85.2%が赤ちゃんとの生活リズムをつかむことが出来たと多くの母親は初めての育児に自信を持ち始めていることがわかる。従って、表6のように母子同室制をどう思うかの質問に全員が肯定的な意見であった。

7) 母子同室の利点を表7に示すが、実際に母親に体験してもらおうと出生早期から子どもの世話を拒否したり、冷淡な対応や言動をとる母親が明らかとなり、妊娠中や出産早期から母親とカウンセリングができ、母親の子どもに対するストレスを和らげ、ハイリスクの母親への支援体制により不幸な母子関係の破綻を予防できるものと考えられる。

表2 母子同室を経験した母親の感想
(スタッフの母親への支援体制の充実と母親の感想の推移)

<母子同室導入初期> (自己中心的な意見)

- ・産後数日はゆっくり休みたかった。
- ・ミルクや糖水を足してほしかった。
- ・せめて、夜間だけでもあずかってほしい。
- ・母乳がでなくて、子どもが泣いて困った。
- ・乳頭が痛い。

<比較的慣れてきた時期>

(子どもを思いやる気持ち)

- ・産後はゆっくり休みたいと思ったが一緒にいられることが嬉しかった。
- ・母乳がでなくて子どもがかawaiiそう。
- ・子どもをあずけて少し眠ろうとしたが、心配でなかなか眠れなかった。

<妊娠中から母子同室と母乳育児について理解してもらった母親>

(母と子の強い絆を思わせる意見)

- ・お乳をやるのが嬉しい。
- ・子供の世話をするのが楽しい。
- ・この子を離したくない。
- ・この子を自分が守ってやらなければいけない。

表3 子どもに対する愛情

(上段：高橋ら 下段：長崎大学)

	この子のためなら何を犠牲にしてもよい	愛情は強いが全てを犠牲にしてまでとは思わない	どちらかという愛情もあるが他のことも大切	計
初産(RI群)	38(42.7)	49(55.1)	2(2.2)	89(100)
初産(RO群)	16(45.7)	13(37.1)	6(17.1)	35(100)
初産	22(68.8)	9(28.1)	1(3.1)	32(100)
経産	15(57.7)	9(34.9)	2(7.7)	26(100)

RI群：母子同室を希望し、主として母子同室を経験した群

RO群：母子別室を希望し、母子別室を経験した群

表4 赤ちゃんが生まれたことによる変化

(上段：高橋ら 下段：長崎大学)

	非常に充実してきた	どちらかという充実してきた	別に以前と変わらない	どちらかという不満が出てきた	非常に不満が出てきた	計
初産	70(34.1)	88(42.9)	20(9.8)	26(12.7)	1(0.5)	205(100)
経産	38(25.9)	57(38.8)	36(24.5)	16(10.9)	0(0)	147(100)
初産	15(45.5)	13(39.4)	3(9.1)	2(6.0)	0(0)	33(100)
経産	14(51.9)	8(29.6)	5(18.5)	0(0)	0(0)	26(100)

図1 退院時の母乳栄養率

(経膈分娩、帝王切開)

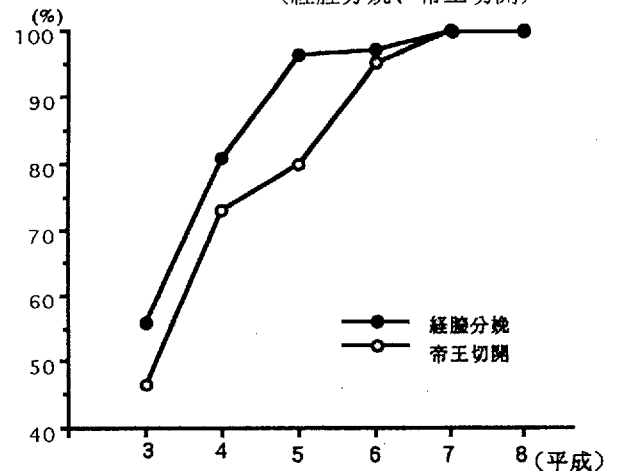


表5 母子同室を経験した感想で当てはまるものに○をつけて下さい。

<複数回答>

	初産婦 27名	経産婦 33名	計 60名
育児に慣れて良かった	26(96.3)	14(42.2)	40(66.7)
ずっと赤ちゃんがそばにいて嬉しかった	19(70.4)	19(57.6)	38(63.3)
赤ちゃんとの生活リズムをつかむことが出来た	23(85.2)	18(54.5)	41(68.3)
体がきつく、つらいと思った	14(51.9)	5(15.2)	19(31.7)
一人でゆっくり休みたいと思った	10(37.0)	3(9.1)	13(21.7)
赤ちゃんが泣いたとき同室者に気兼ねした	17(63.0)	10(30.3)	27(45.0)

(%)

表6 当院では24時間母子同室制をとっています。これをどう思いますか。

	初産婦	経産婦	計
非常に良いことだと思う	23(69.7)	19(70.4)	42(70.0)
どちらかというが良いことだと思う	10(30.3)	8(29.6)	18(30.0)
あまり良いことではない	0	0	0
良いことではない	0	0	0
計	33(100)	27(100)	60(100)

(%)

表7 母子同室の利点

- 1) 入院中に子育ての実践を積むことにより、ある程度子育てに自信をつけて帰ることができる。
- 2) 早期からの授乳刺激により母乳分泌がよくなり母乳栄養率が増加して、自分の母乳だけで育つことにより、さらに自信を持ち始める。
- 3) 早期からの母子の接触により、母子相互作用が円滑に働き、子どもへの愛情、母性が目覚め、子育てを楽しみ始めていく。
- 4) ハイリスクな母親をスクリーニングでき、その家族に対して継続的支援を行い、児童虐待の発症予防につながると思われる。

考察：

私たちの施設では1992年頃より正常新生児に対しては母子分離をやめ、出産後できるだけ早期よりの母子同室と赤ちゃんの要求に合わせた自律哺乳を導入し、出生早期からの育児支援を開始した。その結果、母親

の疲れを癒すために母子を切り離し、なるべく子どもの世話を医療者側で肩代わりをするという一見、母親にとっては理想的と思える環境は逆に母乳分泌量を抑え、母親が子どもに慣れることを妨げ、育児不安を増強させているのではないかとと思われる²⁾。

出生早期より母親と赤ちゃんを一緒にすると、母と子は生後1週間で驚くほど変わっていく。特に出生早期の数日間は女性が母親になっていくための、そして、子どもがこの人は自分の最も信頼できる人だと認識するための、自然から授かった、まさに『凝縮された数日間』だと思われる。この時期がもっとも強く母子相互作用が働き、母と子の絆の原型が形成されると推測される^{3) 4)}。

この凝縮された数日間は授乳と抱っこの連続で母と子は真っ正面から向き合い、まさに人と人の濃厚な関わり合いを行う。しかし、その時期を乗り越えると急に母乳の分泌量が増え、母親は安堵感と乗り切ったことへの自信が見られはじめ、授乳することが楽しみに変わり、お母さんたちから子どもに対する暖かく、ひたむきで、献身的な愛情こもった言葉が湧き出てくる。これがまさに母性の芽生えであり、その母と子の姿は私たちにいつも感動を与えてくれる。

分娩直後の母と子の出会いから生後たった数日間ではあるが濃厚なスキンシップで築かれた母と子の関係が1カ月検診時にも同じように観察される。特に母親が子どもの欲求を喜びとして受け入れる姿勢がみられ、育児を楽しみ、子どもに接する時の態度や気持ちに余裕が感じられる。

おわりに：母と子のすばらしい出会いとこれから始まる24時間、365日連続する重労働の子育てを楽しむものとするか、辛い重労働と考えるかはその後の子どもの心の発達にとって重大である。そのためには妊娠中、出産後の母親の心を温かく支えることが大きな鍵を握る。

母と子が正面から向き合い、母乳、授乳を介した母と子の関わりは、私達が忘れかけた「人間の暖かさ」と「生きることの喜び」を呼び覚ましてくれるように思われる。出産後の母と子を切り離さず、母乳育児を支援することはまさに人と人の絆を強くし、人間のところに豊かさを取り戻す最も簡単な方法であると思われる。

文献：

- 1) 高橋悦二郎、堀口貞夫、千賀悠子、宮崎叶、加藤忠明、網野武博、萩原英敏、藤井仁：母子同室制に関する研究 一第3報 出産後の母性意識・母性行動と母子同室制経験の及ぼす影響一
日本総合愛育研究所紀要第19集, 1-21, 1984
- 2) 福田雅文：母児同室と産婦の“満足度”、
妊娠・育児期のこころのケア（ペリネイタルケア増刊）13:77, 1994
- 3) 福田雅文：「母子同室」と「母乳」と「授乳」
一母乳育児一, 周産期医学, 26:521-524, 1996
- 4) 福田雅文：完全母児同室の理論的根拠.
助産婦雑誌、47:933,1993



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:子育て支援の中で現代の女性の大きな問題点は

(1)少産少子、核家族化のため、初産の母親は子ども扱いにほとんど慣れておらず、出産後の育児に強い不安を抱えている。

(2)子育てを楽しめない、子どもを愛せない母親が増えている。

(3)子どもの要求を受け入れることが出来ない母親が増え、極端な場合は児童虐待に至る例が増加している。

これに対して出産直後から母と子を切り離さず、授乳を介した母と子のスキンシップを増やすことにより、母親は子どもの扱いに慣れ、子どもに対する愛情が強くなった。さらに出生早期からの頻回授乳により母乳分泌が促進され、特別な問題がない限り、経膈分娩、帝王切開ともに母乳だけで退院できるようになり、母親は子どもの要求を満たすことを楽しみとし、生後1週間で驚くほど育児に自信を持ち始めた。従って、出生早期から母と子と一緒にし、母乳育児を支援することは退院後の母親の育児に大きな自信と喜びを与えるものと思われる。